

高尾亮雄と女たち

——菅野スガ・三笠万里子・古屋登世子

堀 田 穰

はじめに

1. 菅野スガ

2. 三笠万里子

3. 古屋登世子

おわりに

参考・引用文献

はじめに

楓蔭高尾亮雄（ふういん・たかお・あきお）はおそらく生涯一冊も本を書かなかつた。こんな人間を後世から描

こうとすると四苦八苦である。どんな仕事をしたのか？初期社会主義運動に加わった。子どものための演劇、お伽芝居に熱を上げた。宝塚少女歌劇、神戸聚楽館の立ち上げに関わった。エスペラント運動に加わった。大阪市北市民館に協力した。子ども愛護運動を立ち上げた。いずれもあまり大成したようではないが、ともかく後世から見ると一番大きかった業績は、明治の終わりから太平洋戦争敗戦近くまで三十年以上も続いた子どものためのツーリズム、「お伽船」を実行したことだったろうか。臨海学校・林間学校のさきがけは、明治四十年代に東京の下谷区(現台東区)や本郷区(現文京区)が実現したのが最初(井上治郎、二〇〇一)とすれば、これはかなり初期の開始であり、また持続性も規模も群を抜いたものなのだ。

けれども、子どものための文化運動に生涯をささげたかのように見えるその生き方も、その出発は社会主義に目覚め、婦人問題に関心を持った若き新聞記者であった。だからこそ、同じような境遇であった菅野スガとも共感しあったのである。ところが、第二次大阪平民社の時代にはすでに、高尾の心は社会主義から離れ、子どものための近代演劇、お伽芝居に夢中になっていった。もし、そのまま菅野らと行動をともしていたら、高尾も大逆事件のフレーム・アップの犠牲になっていたかも知れないのだ。

さいわい、高尾は首筋近くに死神の大鎌の風を感じながらも、片方でお伽倶楽部という枠でお伽芝居やお伽船の活動をしながら、そのお伽芝居の成果は時代の要請で、宝塚少女歌劇や神戸聚楽館での女優養成に生かされるきっかけを得るようになる。高尾の盟友の久松一声は実際に宝塚少女歌劇を育てる仕事に就いていくが、高尾はそのような立場にはたてなかったようだ。しかし聚楽館女優に、小説家佐藤愛子の母、三笠万里子がおり、本を書かなかった高尾は、小説の実名登場者として本に残される。明治や大正に女性解放だのを唱える男

性が世間からどのように見られていたか、佐藤愛子の高尾像はそれを表現していた。

自立した女性、古屋登世子とはエスペラント運動以来のつきあいであったが、戦後その老境を支えあうことになったようだ。著書を残さなかった高尾の人間像を、関わりのあった女性たちの事実を記録することで、少しでも浮き彫りにできればと考えた。

1. 菅野スガ

幽月菅野スガと楓蔭高尾亮雄は、共に婦人問題に関心を抱き、社会主義を大阪に根付かせようと努力したことで出会っている。ただ高尾はその後社会主義運動の枠から大きく外れて子ども文化運動に行き、菅野は大逆事件に巻き込まれ、その命を散らすという正反対の方向へ進んでいったのだ。

明治三十五（一九〇二）年から明治四十四（一九一）年までを菅野と高尾を中心に順を追って見て行くが、高尾を支えた京都日出新聞主筆、雷淵大道和の一のことを交えながらとする。三者とも新聞人であり、大逆事件との関わりを形成していった。

まず、明治三十五年、一月二十八日にユニテリアン社会主義者（武内善信、一九八九）小笠原誉至夫が設立した実業会館の機関紙として『評論之評論』が創刊される。その記者として高尾や吉田笠雨が関わっている。和歌山市から初期社会主義運動が大阪に移って来たはじまりであった。高尾二十三歳。

五月四日には和歌山出身の墨水大亦楠太郎は、足尾銅山鉍毒事件に学生として関わり、学生鉍毒救済会を発展的に青年修養会に改組させていた(松本克平、一九七五)。

八月二十七日、菅野スガは離婚して婦人記者として大阪に戻ってくる。七月三十一日の『大阪朝報』第二十六号の「婦人記者」という記事がその経緯を語っているという(大谷渡、一九八九、四七)。社会主義の立役者たちが、大阪に勢ぞろいという所だが、菅野はこの時二十一歳、病に倒れた父を伴って、婦人問題に強い関心を抱いていたが、まだ社会主義者ではなかった。

明治三十六(一九〇三)年、一月十三日には東京の社会主義協会が関西で演説会を開く。この年三月から七月まで、大阪の天王寺・今宮を会場に第五回内国勸業博覧会が開催され、大勢の観客が見込まれた。この博覧会がいろいろなことの引き金になるのだ。

二月二十四日、まずこの博覧会の余興に芸妓の舞踏会が企画されたのを知った菅野は、『大阪朝報』で反対キャンペーンを張る。

四月三日『社会主義』第七年第九号に「児玉花外、奥村梅、高尾楓蔭等の諸君は大阪社会主義研究会を起せり」という記事が掲載されたように、社会主義者たちは大阪に社会主義を根付かせようとする。

四月五日、六日、博覧会でにぎわう中で社会主義大会、演説会を開く。東京からは安部磯雄、片山潜、木下尚江、西川光二郎、迎える側は小笠原誉至夫、三宅磐、児玉花外だった(大谷渡、一九八九、七四)。ここで、菅野の働きかけに木下が応じ、芸妓舞踏反対の演説をしたのだ。

四月二十五日、木下の演説が契機になり、キリスト教の婦人団体である大阪婦人矯風会が、大阪青年連合会とともに「博覧会舞踏反対大演説会」を開くに至る。

六月十五日、大道雷淵が京都日出新聞主筆に迎えられ「初めて読者諸君に見ゆ」を京都日出新聞に書く（松本峻、二〇〇九、二二）。

六月三十日『紀伊毎日新聞』「文士劇を見る」の記事では、高尾はまだ和歌山市に活動の中心があったのか、吉田の脚本で、高尾、児玉花外、沖野岩三郎らが出演し演劇活動をしていた。

七月十五日、横浜ではお話を開いていた久留島武彦を川上音二郎が訪ね、お伽芝居の示唆を得る。

九月二日には高尾、吉田それに大亦まで参加して交談倶楽部という集まりの第一回を行っている（武内善信、一九八九、一六四）。

十月三日に東京本郷座にてはじめてのお伽芝居を川上一座として上演。

十一月八日、天満基督教会で菅野が受洗する。

明治三十七（一九〇四）年、一月三十一日、大阪中之島公会堂で川上一座がお伽芝居を上演、高尾がこれを見に行つて『評論之評論』第七二号に見聞記を書いている。以下に収録しよう。

公会堂のお伽芝居

去年東京に於て初めて生れたお伽芝居、それは去月三十一日我大阪中の島公会堂に於て川上夫妻及び高

田一派の新俳優等に依て特に市内の少年少女の爲めに催された、東京からはわざわざ巖谷小波や久留島武彦氏等が来てお伽芝居に就ての演説をした、俳優の高田君がいった如く実にあのお伽芝居は小波山人共の父となり川上貞奴その母となり明治時代の一産物として歓迎せられつつあるものだ、「狐の裁判」は独逸の有名なお伽噺、「浮かれ胡弓」は瑞典のそれである、前者は全く動物界のことで其の筋もまま無理なところがあつて余り思つたほど感心しなかつたが後者に於ては非常に面白味を感じた、それは原作そのものからして能くできているからでもあろうが見物には大喝采であつた。

狐の裁判の方は川上が主人公で其の狡知な狐のしぐさは他人には一寸できない流石はうまいと思わしめる、浮かれ胡弓に至つては貞奴の当て役で貧青年フレット水の垂るような若くて美しい姿しかもアドケない態度が何ともいえないところだ。

そのせりふもハキハキとして実に氣持のよい中野の吝嗇主人は流石に手についたものでその冷酷な性格を演じ得て遺憾がない、後段になつて踊りながら上衣もチョッキも脱いでしまふあたり其妙な滑稽といつたら誰でも抱腹絶倒しないものはない、拍手喝采の起るはここからで其の宿屋の場に於ける舞踊は実に賑やかで大勢の人形が何かこう機械で動き出すようで面白い。

望むらくはこれを大人ばかりが演じなくなつて小供芝居であるから小供を多く入れたら一層無邪気で可愛らしくてよいと思う、お伽芝居を観ていると一種不思議に現実界を離れて樂天的になつてしまふようだ

(楓)

これで高尾はすっかりお伽芝居の虜になってしまふのだ。お伽芝居の仲間になる大亦楠太郎は、この頃、東京の青年修養会で社会主義演劇の萌芽ともいう活動をしている。

三月七日『修養』第一号には大亦が新案即席演劇、草村北星の「浜子」を、五月五日『修養』第三号では木下尚江作「火の柱」を演じた記録がある(松本克平、一九七五、一三三〜一二七)。

七月十八日、菅野は東京の平民社で堺利彦に会っている。

十月五日には山口孤剣、小田頼造の社会主義伝道行商が東京を出発。赤塗りの箱車に社会主義書類、書籍を積んで売り歩いて九州まで辿りつくのだった。

十月三十日、『平民新聞』に「大阪平民新聞読者会」を作ろうと菅野が呼びかけていた。

十二月九日、伝道行商、大阪到着。

十二月十八日、「伝道行商記」が『平民新聞』に掲載されており、第五十八号では高尾楓蔭、奥村梅皋、三宅磐らに会っている。

十二月二十五日、第五十九号では菅野スガに会ったことが記された。いよいよ大阪の社会主義研究会のメンバーたちが、伝道行商によって結びつけられたのである。

明治三十八(一九〇五)年、一月八日、「社会主義の弘通、社会問題研究」のための大阪同志会が設立される。

二月十二日には大亦が社会問題を劇にする社会劇会の活動。

三月二十日、森近運平による大阪平民社(第一次)が設立。四月一日、十五日、五月一日、十五日、六月一日、

十五日と一カ月に二回のペースで社会主義研究会を開き、森近と高尾亮雄がほとんど交互に発表している。

五月一日の高尾は「婦人問題」また、六月十五日には大亦楠太郎が「社会劇について」の発表をしていた。

しかし、事業や研究活動は警察の弾圧と監視で行き詰まり、また、大阪という風土に社会主義がまだ根付きにくかったこともあり、森近は大阪平民社をたたみ、秋には上京してしまう。(大阪社会労働運動史編集委員会、

一八八六、三三五)

明治三十九(一九〇六)年、二月四日、菅野スガは船で紀州田辺に着き、官吏侮辱罪で入獄する毛利紫庵の代わりを務めるために牟婁新報社に入社したのだ。(大谷渡、一九八九、二三九)そして二月二十七日、二十四日付けの紀陽新聞紙上高尾楓蔭の「幽月女子に与う」という文に応えた「楓蔭の君に返す」を『牟婁新報』に掲載する。

楓蔭の君に返す

幽月女

廿四日に紀陽新聞紙上『幽月女史に与う』の御一文有難く拝見仕候。

其筋の犬に追われ、迫害の網を潜りつつ結びし同志の、始めて浪花に会合の席上、御目もじ致して以来、早や二年、誠に夢の様にて候。

同志会の後身たる大阪平民社の熱血男児森近氏の「大阪には真面目なる社会主義者一人も無し」とて、奮然東都に去られて以来、杳として同志の消息に接するを得ず、且や妾は父逝き妹去り、只一人寂寥なる

生活をなしたれば、従つて同志諸君とも疎遠になり居たるに、今回凶らず此地に來りて、凶らず君の御名に接せんとは。

「同志会を生める母は女史にしてそを護りいるは予なりしものを……」の御一句、同志四散の今日思えば、実にうら悲しくも懐旧の念に堪えず候。

されど君よ同志会の四散何かあらん、此暗黒社会に生まれ出たる吾人、おたがいになお春秋に富める同主義者が責任は、日一日いよいよ重きを感じる時に、血は燃え肉は躍り、区々たる小事を顧みるの程さえ無きに非ずや。

君よ、君が女子自ら起て置娼に反対せよの御言葉も今は甲斐なし。

何者の痴漢が、廢娼をこそ叫ぶべき婦女子の血を飽かんとするの暴虐。

ああ、君よ、君よ、妾はここに至つて我等社会主義者の責任の、いよいよますます重かつ大なるを感ぜずんばあらず。

君よ、主義のため、社会のため、さいわいに自重自愛せられよ

残念ながら高尾の「幽月女子に与う」を掲載した紀陽新聞は未見であるが、「婦人問題」を論じ、「女子自ら起て置娼に反対せよ」と主張し、菅野も共感していたことはいふことができる。青年期のこのような出発と、晩年の古屋登世子との関わり方を見ても、佐藤愛子の描いた高尾像は白黒反転のネガフィルムのように思える。

三月十七日、神田美土代町の青年会館で、「お伽倶楽部」の主幹となつた久留島武彦は第一回の「お伽講話

会」を開く。子どものための総合文化運動の始まりであった。(富田博之、一九七六、五七)

五月二十九日、毛利が出獄し、菅野は田辺を立ち京都へ戻る。(大谷渡、一九八九、一五四)

六月二十四日、大阪中之島公会堂で高尾らがお伽芝居を開催。アマチュアのお伽芝居公演としてはもともと早いものであった。

九月二十三、四日、中之島公会堂お伽芝居公演。

十二月十一日から大阪お伽劇団、和歌山紀の国座お伽芝居公演。久松一声、大亦墨水、吉田笠雨、高尾楓蔭ら。(富田博之、一九七六、五八)

明治四〇(一九〇七)年一月一日付『牟婁新報』第六六四号「としのはじめ」菅野、荒畑寒村と結婚し、『毎日電報』の女性記者として上京したことを報ずる。(大谷渡、一九八九、一五六)

一月八日、大道雷淵、京都日出新聞巻頭に「お伽俱樂部」を書き、この運動を称揚。

一月十一日、大阪お伽俱樂部発会。高尾、久松、大亦、吉田ら。

一月二十日、京都お伽俱樂部第一回お伽会。大道顧問、鈴木吉之助主事、中野忠八会計。京都日出新聞巻頭に大道雷淵が「お伽俱樂部起こる」を書く。

三月八日、京都日出新聞巻頭「お伽芝居」を大道が書き、お伽芝居を称揚。

四月七日、京都お伽俱樂部が正式に発会。大阪と京都の活動が協力的になっていく。(堀田穰、二〇〇三)

六月一日、宮武外骨の援助で森近連平が大阪に戻って来て『大阪平民新聞』創刊号を出す。高尾はそこに

「大阪の平民社(思出草)」を書いている。これも収録してみよう。ただ、高尾はその後大阪平民社等社会主義運動には関わっていない。

大阪の平民社(思出草)

高尾生

社会主義の新聞、社会主義の結社は幾度潰され幾度解散されても社会主義の思想は段々広く伝播して何時の間にか何処かに芽を萌き頭を揚げてくるから不思議だ。大阪に再び平民社が出来たのでその筋ではまた五月蠅と定めて思っているだろう。

僕は最も初めから同主義者のことを知って居るから併せて平民社の小史思出草を書いてみよう。無論、隠れて居る同主義者は古くからあるだろう、今でもあるに違いない。表面名を出した人でも今は憚って居るのか墮落したように思われる人もあるが最初とにかく大阪において日本社会党の歴史に残るの出来事は博覧会の当時日本社会主義者大会が開かれたことである。そして一の決議をなした東京から会したのは安部磯雄、木下尚江、片山潜、西川光次郎君等朝日の三宅操山君など非常な熱心で児玉花外君が激越な調子で新体詩を朗読したのが未だに耳に残っている。

後東京に平民社ができて平民新聞ができて大分運動が激烈であった頃大阪でも同志会というものが起って寄り寄り集会して居た、ところへ岡山から森近君が来て東京平民社と連絡して事を起そうと大阪平民社なるものが初めてできたが今では一昨年。

当時の事を思うとなかなか滑稽なことがある。田箕橋の平民社の前には何時も制服の巡査が番をして

いる、盗人の用心はよいが行人はベストかと思っていた。出入りするものは誰でも名前を記けられて一挙一動監視をおろそかにせぬ、堂々たる日本政府が僕のような一青年にまで注意をしてくれるのはむしろ実に気の毒なような感じがした、しかし随分迷惑なものであった。

東京平民社は遂に圧迫に倒れた。平民新聞はなくなった。この間大阪平民社もその城を守るべく余程の困難であった。森近君の独力よく戦ったが相手は大日本帝国の政府だ、敗けるのは当然、遂に大阪平民社も潰れた。否や形だけは潰された。森近君は東京の同志を助けるべく上京してしまつて大阪は一時中心をなくしたが東京の方では幾度遷、平民新聞は「直言」となり「光」と而してまた遂に日刊として平民新聞ができた、と思う間もなく、又々禁止だ。こちらでははた出たナと思う位のこと、それぞれ処分をして同志は四散した。森近君は二度目大阪平民社をこしらえるため来た。而して今度は大阪で機関新聞を発行することにになった。これだけが以前より進歩している。しかし何時倒れるか知れない、きつとまた潰されるに違ひはない、それは分かっている、が行けるところまで行くのだ、新聞は倒れても思想は決して倒れぬのだ、これが我等の意気だ、男子らしい意気だ。

十一月三日、幸徳秋水歓迎茶話会を大阪平民社で開催。

十一月二十四日、神戸平民倶楽部第一回社会主義講演会に、大石誠之助、森近運平、荒畑寒村ら招かれ出席。

(大阪社会労働運動史編集委員会、一八八六、三三二)

明治四十一年(一九〇八)年、一月十九日、クロポトキン『相互扶助』を大道が訳して京都日出新聞に連載始める。大杉栄訳は大正六(一九一七)年なので、相当早い時期の訳業になる。クロポトキンは露国の貴族であるが、無政府主義者である。しかし、凶刀やダイナマイトなどを振り回す者でなく、相互補助の精神が、社会の運営と浄化に必要であることを説いている。(松本皎、二〇〇九、三三三)

五月二十二日、大阪平民社(第二次)弾圧のきびしさのため解散。

六月二十二日、東京神田、赤旗事件、菅野も検挙される。(大谷渡、一九八九、一六二)

十月一日、三重県津市曙座、高尾、大亦らのお伽芝居が「公安を害する」として警察によって中止させられる。(武内善信、一九九六、一七七)

十一月二十八日、大石誠之助、東京からの帰途、親しくしている歯科医師、山路二郎に歯を治療してもらった折りに、大道雷淵に初対面する。京都日出新聞編集局に徳美松太郎がおり、明治四〇年夏頃まで和歌山新宮の熊野実業新聞の記者だったので、大石とはよく知った仲であった。この徳美の仲介で、大道の自由主義的な社説に関心を抱いていた大石が訪ねたのだった。(松本皎、二〇〇九、三三二)

十二月一日、京都から大阪に来た大石は常宿の村上旅館(西区新町)で、大阪平民社常連の武田九平、岡本穎一郎、三浦安太郎、岩出金次郎、佐山芳三郎ら五人に東京の幸徳秋水の『みやげ話』を語って聞かせるが、これが天皇暗殺計画に旧大阪平民社の面々が賛同を示したというデッチあげ、いわゆる「十一月謀議」となってしまう。(大阪社会労働運動史編集委員会、一八八六、三三三)

明治四十二(二九〇九)年春、赤旗事件によって二カ月以上も拘禁され、毎日電報社を辞めなければならなかった菅野は幸徳との恋愛が進み、夫婦となるが、赤旗事件で入獄中の荒畑の妻を幸徳が奪ったと誤解され、同志の多くが離反し、二人は孤立化していった。(大谷渡、一九八九、一六五)

五月二十三日、大石誠之助の「家庭破壊論」が京都日出新聞に載る。内容は、門地門閥によって家同士の間で縁組が決められ、封建的な結婚生活を維持するのは間違っている。男女の愛によって家庭は築かれるべきだ、というような趣旨であった。しかし、この時点では官憲から問題にされなかった。

六月十日、「家庭破壊論」を幸徳秋水と菅野スガが無政府主義の機関誌『自由思想』に、ほとんど全文に近い紹介記事を掲載すると、発禁処分と幸徳、菅野への罰金刑が科せられる。これが京都日出新聞に飛び火し、編集発行人は罰金刑に処せられたとある。(松本皎、二〇〇九、三五)

八月十日、京都日出新聞に「播州高砂海浜学校(第一信)」が鈴木吉之助の名で掲載される。そこには大阪お伽倶楽部の高尾が女生徒団を率いて合流して高砂へ向かった事が記されている。

明治四十三(一九一〇)年五月二十五日、大逆事件の検挙が始まる。

八月十二日、京都日出新聞に「お伽船記(一)」。「京都お伽倶楽部は大阪神戸のお伽倶楽部と糾合して、そこに東京の巖谷小波、久留島武彦、天野雉彦も加わり、大阪商船の利根川丸を借り切って別府までの「お伽船」を敢行することになった。八月七日出発であった。(堀田穰、二〇〇〇)

九月十日、第一回検事聴取書、徳美松太郎、大道雷淵ともに大石誠之助が大道宅を訪れた事を聴取されてい

る。

九月十一日、第二回聴取書、大道は「相互扶助」掲載の新聞切り抜きを提出。(松本皎、二〇〇九、三三)

明治四十四(一九一)年一月十八日、大逆事件判決、二十四名死刑。

一月十九日、十二名を特赦減刑。

一月二十四日、十一名を死刑執行。

一月二十五日、菅野スガの死刑執行。

八月二日、京都日出新聞「京都お伽倶楽部の東京日光周遊会」。(堀田穰、二〇〇〇)

京阪神お伽発達史

高尾楓蔭

(前略)

四十四年には駒の頭を東に向け、東京、日光へのコドモ団体というものを始めました。東京のコドモは決して京都へ来ないのに、こちらからは帝都へ押しかける。東京の同志が歓迎してくれた事は申すまでも在りません。

(後略)(高尾亮雄、一九九一、五二)

たった数年で、二人の道は大きく分かれて行ったのだった。

2. 三笠万里子

佐藤愛子は、おそらく作品に高尾亮雄を实名で登場させた唯一の小説家である。佐藤愛子の母、横田シナが高尾の指導を受けた経験があった、その母の生涯を描いた『女優万里子』が登場舞台なのであった。

「大正二年二月十日付神戸新聞

聚楽館女優の応募者

京都方面の照会多し

『聚楽館』において募集中なる女優応募者は発表後日尚浅く、且つ大阪方面は八日今橋の京華社を申込所に充てしぐらいの手順なるを以てこの方面よりの照会は至って少きも京都方面に志願者多し、九日までの照会者は既に数十人に及びたるがその中九分は当市居住者にて本人直接来会するものなく大抵は人を以てし、若くは電話を以てする様子にて目下の処正式に申込みたるは荒田町に一人、楠町に一人あり。何れも年齢十六、七歳にて親戚に伴われて同館に至りたりと。女優志願者は何れかといえば勝気の者なるべきに己れ一人にては入り得ざるものと見え、志願者らしき女が事務所の前を往来するもの多々あるも遂に入り得ず且つは締切が二十五日なれば余日ありと見て空しく引返せる向きもあるらしく、同所にてはこれにつき便法を設けんと

て目下考案中なり。

また女優となるべき資格について当事者の語るところによれば色の黒き者は化粧を施してその欠点を補うを得なければ少しも差支えなければ、足の短きものはその資格に乏しく顔の道具はすべて大なるを以て可しとす。殊に眼の大なるは一層良好なること勿論なり。尚また技芸に富むといえども内気の者は舞台にて気遅れを来たし、折角の技倆を發揮し得ざるべければ之も採用されず。殊に風紀上の取締を最も嚴重とする方針なるを以て自然芸妓出は避くる方針なりと』

同年二月十九日付神戸新聞

女優志願七十名

宿舍設置さる

『高等娯楽場聚楽館が座付俳優を設くる目的にて館内に演芸練習所を設置し女優を養成すべく目下志願者募集中なること既記のごとく発表十日以来今日までに定員二十五名に対し正式の申込をなせしもの七十名、履歴書のみを以て申込者と心得所謂不完全なる申込者百余名に達したるが、この内当地は半数以上の多数を占め、他は播州、淡路、岡山、広島、博多、門司、下の関、小倉、鳥取、大阪、京都、和歌山、和泉なるが年齢は十八歳最も多く学力程度は小学校卒業の者多けれど中には某女学校卒業生も三、四名あり。また同館にては女優の品性について兎角の批評ありて取締上大に注意すること多きより絶対に寄宿舎を設けず自宅若しくは監督者の許より通勤せしむる方針なりしも前記の如く地方よりの申込者少からぬことと

て寄宿舎の必要を生じ来りしかば方針を一変して設置することとなりしが目下同館には適當の場所なきより同館に接近せる家屋を借入れてこれに充てんと目下選定中なるもなるべく監督者の元より通勤せしむる筈、因に生徒に対する貸費は一ヶ月七円の予定にてこれを以て賄費は元より小遣錢に充てしむるものなりと』

同年三月十日付神戸新聞

聚楽館女優試験

『高等娯楽場聚楽館にてかねて募集中なりし女優志願者の採用試験は当地在住者に限り去る七日より三日間、便宜奉行すべき旨通知を發したるが初日は僅々八名なりしも二日目は十五名三日目は元の八名合計三十一名にて他は出席せず。然して試験は同館事務室樓上の芸術練習場において行いたるが、受験者は女のこととて一時には行わず、各一人ずつ執行せしが元來容貌の美ということが試験の最大要素なれど教育の有無は舞台上の活躍に大關係を有することとて學術試験として読書には小説一葉全集の中一二節を素読せしめ、又作文には「女優志願して父母の許しを得しこと」「春の日」の題を出し何れなりと好む所を取らしめたるものにて學術試験を終りしが作文の応募前者を取りしもの大部を占め何れも成績優良なりき。尚尙の如何を試むべく普通談話をなさしめたる後、身体検査に移り国立大病院長大國医学士主任により心臓病の有無、身長等を検査したり。近視は極度のものなきも稍それに含めらるるもの一割ぐらいあり、病者は脚氣を除くの外全くなし。身長も同館は五尺以上に望みを抱きおりしも五尺以上は極めて少数なる

をもつて、四尺七寸以上と改めたり』

同年四月九日付神戸新聞

新女優の始業式

十二日聚楽館楼上に挙行

『聚楽館にて募集中なりし女優は既に合格者の詮衡を終り確定したるものは当地六名、その他七名、合計十三名なるが尚、他に四名の合格者あれど之は未だ確定に至らず授業の開始は明十日の予定なりしも準備遅れしたため来る十二日に延期し同日午前九時より同館楼上稽古場において始業式を挙行すべく当日は舞と義太夫の二科目にて義太夫の師匠は当日までに決定すべく舞部は当地の小西春雨とて山村派より出でし人なりと。尚当日は滝川社長その他重役、新聞記者等を招待し席上社長若しくは小田支配人より一場の女優心得を訓示すべしという』

同年四月十三日付神戸新聞

新女優十名

聚楽館女優の始業式

堂々たる抱負と気焰

『高等娯楽場聚楽館の座附女優は再三記載したる如く試験合格後家庭の都合にて取消したるものあり。』

結局十六名となりその中既に大阪四名、岡山一名、大分一名、新舞鶴一名、神戸三名都合十名到着したるも尚大阪二名、福岡、奈良、播州、広島各一名合計六名の不参者あり。それがため授業開始を延期し来りしもあまりに発表を遅延するは宜しからずとあつて到着者十名を確定数と認め、愈々昨十二日午後二時より同館事務室楼上稽古場において開業式を挙行し滝川社長を初め、直木政之介、小手川信次、小寺成蔵、小田同館専務取締役等参列し女優十名は新派山村流舞踊の師匠小西春雨女に率いられて列席し先ず滝川社長起つて一場の挨拶を述べし上、女優の健全なる發達を望むとその希望を述べ大阪お伽俱樂部高尾楓陰氏の所感演説ありし後、女優を代表して大橋美子進み出て、簡單なる答辭を述べ且つその沈着なる態度と重々しき語調にて女優將來の抱負を吐露したるより満場拍手起りこれにて式を終了し後山村師匠の地にて「番い離れぬ」を舞いこれ又喝采にて、始業の事を終りしが右十名の合格授業生は、吉野たま(二十二)井上福弥(十五)広瀬育子(十六)大橋美子(二十二)山本操(十九)清田幸枝(二十)黒田たみ子(二十三)安藤島子(二十)西村梅子(二十)横田しな子(二十)にて大橋美子は岡山県立高等女学校を、又、西村梅子、横田しなの兩人も高女出身にして英語の素養もある由なり』

同年六月二十九日付神戸新聞

『第二のサラ・ベルナルを以て自任する十名の聚楽館女優諸嬢が同館株主總會の余興として芝居、舞、對話、西洋唱歌など、ありたけの賑やかさで、勉強の成果を取りまとめて御覧に入れた。

とにも角にも教えも教えたり、習いも習ったり、これでやがて舞台に立つて黄色い声を張り上げられる

と思うと、慄えが止らぬようなものすごさ、最新式角力(すもう)ダンスとでもいいような「石橋」の、指す手引く手の兵式体操。大悲劇「未尽池」では、「貴女、ぼくの要求を拒絶するのですか？」などは夏尚寒気がする名文句である。

とに角、兵式体操でも角力ダンスでも、乃至は頸しめられし七面鳥の叫びよろしきコーラスでも、これでも芸術よ、いやサ女優ですよと臆面もなく人前に演つてのける勇氣は噫！ 偉い！

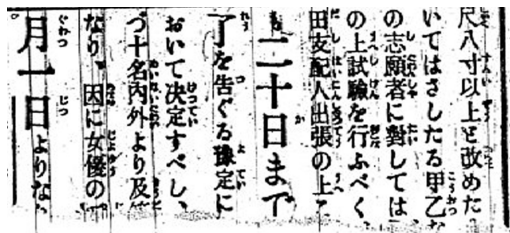
同年八月十九日付神戸新聞

『かねて新築工事中なりし湊川新開地の高等娯楽場聚楽館はその後着々工を進め、昨十八日愈よ工事落成を告げたり。

その第一回興行は幸四郎梅幸と帝劇女優にして狂言も悲劇「日の出」、喜劇「結婚反対倶楽部」、史劇「名和長年」所作事テコ舞い、踊りは西洋物の「胡蝶だんす」と決まりたり』

(佐藤愛子、一九七四、九〇〜九四)

長々と引用したが、これが小説の核心で、大正二(一九一三)年に神戸新開地に現われた聚楽(しゅうらく)館に女優として応募した佐藤愛子の母親、横田シナが父、佐藤紅緑と出会った頃を描いている。ただ神戸新聞の記事をそのまま引用しているような書き方をしているが、実際の新聞記事と見比べてみると必ずしもそのままではない。二月の記事は、神戸市立中央図書館にある神戸新聞のマイクロフィルム記事そのままだが、三月の記



図版1 下端が破り取られている
三月十日神戸新聞原紙

事は、終りの方の文章が略されている。マイクロでは原紙が破られており、その辺りが略されている。四月九日の記事はそのまま。四月十三日の高尾楓蔭の名前がはつきり出てくる記事こそ、もともと確かめたものだったが、記事全体が破り取られてマイクロでは確認できなかった。六月と八月の記事は大幅に略したり、記事にない部分が付け加えられたりと改変されている。

大正二(一九一三年)という年は、今日宝塚歌劇の発祥ということ記憶されている。宝塚少女歌劇という存在は、特異特殊な演劇としてユニークな位置を占めているわけだが、同時期に聚楽館が立ち上がっていた所を見ると、むしろ時代的な流れだったことが分かる。しかも、そのどちらにも高尾亮雄が指導者として関わっていたようなので、世間の好奇のまなざしは別として、お伽芝居を引き継ぐ演劇という性質が実は強かったのだ。

ここで、佐藤愛子『女優万里子』に描かれた、高尾像を引用してみよう。佐藤は楓蔭を「陰」と記す。

「聚楽館女優養成所の主任教師として招かれたのは大阪でお伽劇を主催していた高尾楓蔭という演劇家であったが、楓蔭の講義は島村抱月の芸術座の話になると俄然熱を帯びて朗詠口調となるのであった。

——新しい演劇への苦悶。

楓陰が稽古場の黒板に勢いよくそう書くと勢い余ってチョークが折れて飛んだ。

——明治三十九年、逍遙の文芸協会は新しい演劇への第一歩を踏み出した。日露戦争後の社会はあらゆる面で新しいもの、解放を求めるものが泡立ち沸騰していたのだ。それまでの大衆の涙と溜息を呼ぼうという芝居からより真実を求める演劇が呱呱の声を上げた。それが文芸協会であり、歌舞伎の反逆者市川左團次と小山内薫の自由劇場である。しかし今や、その『新しい演劇』はもはやいき詰り、我々は更に新しいより真実なものを求めて立ち上がるうとしているのです……。

楓陰は額に落ちかかる長髪をかき上げかき上げ、我と我が言葉に酔い痴れて興奮にかすれた裏声になった。

『誰がそれを作るか！より新しい真実を、一部の愛好者だけではなく、真に大衆の魂を揺すぶる演劇を誰が築くか！島村抱月か？松井須磨子か？自由劇場、近代劇協会、いずれも期待は出来ない』

楓陰はオーバーな身ぶりで髪をかき上げた手をさっとふり下ろして人さし指をパツとつき出した。

『君だ……君だ……君だ……君らの一人一人がその使命を担っている！東京にもないといわれるこの日本一の演劇の殿堂から、明日の日本の演劇が生れなければならないのだ……』

(佐藤愛子、一九七四、九九)

「楓陰は聚楽館の出発から参加して、何も知らぬ小娘の女優生徒の手取り足取りして、どうにか舞台に立てるところまで引っぱって来た。自分の手で新しい日本の女優を生み出そうという情熱に燃えていた。」

(佐藤愛子、一九七四、一一七)

「楓陰が叫んだ。

『何や、子供じゃあるまいし、小田専務がそないに怖いのか！あかんなあ、横田くんは……小田専務が文句いおうと何しようよと、君は日本一の女優になつたらええのだ。添物女優でも寄宿舎の褒められ者やつたらええのんか？君にとって何が大事なんか。え？よう考えてみるよ。横田くん。女優なんちゅうもんは奔放やないとあかん。松井須磨子を見てみイ。世間では何のかのと取沙汰しとるけど、あの奔放さが須磨子の芸を産んでるんやで……』」

『佐藤紅緑がな、新日本劇という劇団を作つたんや。高尾君の友達で元安豊いう奴がそこに入つとるんやけど、ぼくも元安ならよう知つてる。この間、高尾君が東京へ行ってぼくのことを話したら、ともかく東京へ出て来い。芝居やるんなら東京や、大阪みたいなどこにいてはどないもならんとしきりにいうとつたそうや』

シナは片手に梳き櫛を持つたまま、目瞬もせず三浦を見上げている。」（佐藤愛子、一九七四、一五八）

高尾はここで、「女たらしの頭でつかちな軽薄者」というように描かれている。それは佐藤紅緑が、女たらしは同じかも知れないが、豪傑で熱血で実質的な男性像であるのとは正反対、対照的であった。

初期社会主義運動に関わり、確かに女性解放思想にも触れていて、大逆事件でおそらく生命の危機も感じて、児童文化運動の方へ転身していった高尾楓蔭亮雄が、単なる「女たらしの頭でつかちな軽薄者」とは思えないが、確かにそのように見られる一面があったのに違いない。ただ、虚構を解読するのに、注意が必要なのは、

この小説作品での演劇に対する情熱は、作者が戦後の新劇運動から類推しているのではないかという点だ。高尾亮雄研究の文脈からは、明治末期から大正にかけて、子ども、児童のことに関わることで自体が新しい地平を拓くものだ、という認識があり、その下にお伽芝居が成立した。高尾亮雄が宝塚少女歌劇、聚楽館の成立に関わったのも、お伽芝居の実績を買われたものなのだ。宝塚歌劇については詳細な演目記録が残っているので、初期のものを見てみると、

大正三(一九一四年)

四月一日～五月三十日

歌劇 ドンブラコ

北村季晴

喜歌劇 浮れ達磨

本居長世

ダンス 胡蝶

宝塚少女歌劇団、目賀田万世吉

八月一日～八月三十一日

歌劇 浦島太郎

安藤弘

ダンス 故郷の空

安藤弘、高木和夫

十月一日～十一月三十日

歌劇 紅葉狩

小林一三、安藤弘

同 音楽カフェー

安藤弘

ダンス 欧州戦争

宝塚少女歌劇団

大正四(一九一五年)

一月一日～一月七日

歌劇 兎の春

小林一三、高木和夫

三月二日～五月三日 歌劇 平和の女神 薄田泣菫、安藤弘

同 雛祭 小林一三、高木和夫

七月二日～八月三十一日 歌劇 舌切雀 薄田泣菫、安藤弘

同 蟬時雨 久松一声、高木和夫

同 御田植 小林一三、安藤弘

(宝塚少女歌劇団、一九三三、三十七～三十八)

と、あるように、「ドンブラコ」は桃太郎だし、「浦島太郎」「雛祭」「舌切雀」等まさに子ども向け演目が多いのが目立つ。演劇女優の先駆者、川上貞奴が、女優と見られるのを嫌い、唯一お伽芝居の成功を心の支えとしていたように、女優に対する社会の視線は厳しく、唯一子ども向け演劇という点が突破口だったはずのニュアンスが、佐藤愛子の小説作品からは感じられない。作者は母親から高尾への見方を受け継いだのだろうが、それは社会一般からの見方であったのだろう。

ところで、小説家からこう書かれた高尾本人が、聚楽館時代について、佐藤愛子の小説よりよほど小説っぽい文章を残していた。しかもそれが大正二年だからまさにリアルタイムであった。ここに全文引用しておこう。

「呼(ああ)、嘉鶴子(かづこ)は死んだ

高尾楓蔭

聚楽館の女優生徒葉澤嘉鶴子、あの子は眼瞼の時々黒くなることのある子だった、少し神経が興奮する

かなんぞの時は……、私が初めてそれを発見したのは沙翁劇の『十二夜』のある役を振つけて、明日までにキッとその台詞を暗記してこいと命じた翌朝であった正直に夜一夜眠らずに稽古したものと見える、あの子の初めて女優養成所に這入ったのは五月の末頃だったと記憶している。

あの子は十二月生れ、歳弱の二十歳だから実の所は丁度十九の厄年だったのだ、父は旧小田原藩の士族で、ある時は県官吏をも勤めていた位、家庭は厳格過ぎる程で姉嬢は他に嫁し兄は外商館に勤め、妹と末弟とは家に居る、嘉鶴子は丁度その仲に介(はさま)れた愛嬢であったのだ、頑固一徹の旧思想の父と新しい空気に育った嘉鶴子とは到底一致しそうな筈がない、父の気性と受けついた嘉鶴子も中々敗ぬ気の女、常に思想上の衝突は免れなかった、親からは無理からぬ圧迫―しかし親切な―を受け、それが耐えがたい苦痛、嘉鶴子が女優になるまでには千々に心を煩し、ようやくに打勝った悲しい涙の経歴を持っている、女優の志願をすると聞いた時に父は痩せても枯れても武士の果て、その不心得を責める為には伝家の刀を抜きかけまじき強意見をしたそうな、嘉鶴子は刃の下をくぐって芸術の子とならんとしたのである、物の分った叔父さんの仲裁もあったが、嘉鶴子の入所は実に命がけの仕事であったのだ。

嘉鶴子は三月遅れて這入って来たけれど、死身になって勉強したから上達は早かった、寄宿舎に同宿するようになってからも皆に畏敬されていた、そうそうあの子は能く笑う子であった、皆の中で一番の笑う口であった、あんなつらい経歴を持っていながら、やはり青春時代の娘たる事は免れないで頗るの愛嬌者だった、真面目な白の稽古の時までゲタゲタ笑って仕様がな、それを吐ると尚余計に笑いこけるのだから困った、その可愛い笑凹は今もありありへ胸にある、あの子の又白い歯、お父さんから習ったと云って

時々独り其の口から謡曲を謳っておったのを聞いたこともある。

九月の中頃、第一回の試演に『女文士』の音楽家をやったが舞台ではさすがに笑わなくて飽くまで悲劇的人物になり澄ましておった、此の子だけが新調の洋装なので、大層うれしがっていた、ボンネットも絹の手袋も皆上等のを頭取にそう云って誂えたのを喜んで、初日が近づくとも夜も眠られぬほど無邪気に楽しんでたのだった、初舞台にはお化粧も私がしてやった、堅いコーセットを締めてやったのに痛いのを我慢しておった顔が今も眼に残っている。

試演劇の二日目の晩だった、発熱が劇しい様子だったので私は明日から朝の稽古だけは休んで舞台は大切だからどうしても出ておいでと云って帰した、私は箕面へ帰って知らなかったが、その夜ますます容態が不可いので、遂々県立病院へ入れられたのである、初めは左程重患でもない様子だったので段々に悪くなって腸潰瘍だという、同級生からは毎日天清園から買って来た花を枕元に贈って慰めていた、嘉鶴子は病床に居ながらも、いつもいつも芝居の事、舞の事、稽古の遅れはせぬかと気にしてばかりいた、ああ嘉鶴子はその月の末、二十八日の夜とうとう死んで了った、二三日前危篤の報を親に通じたけれど、嘉鶴子とは親子の縁は切っている、死ぬと生きようと赤の他人だと云って頑固な父は同じ市にいながら見舞いに来なかつた、それでも実母と実兄とは出て来て世話をしておった、そして臨終の枕辺にも逢うて、此の薄命な子の口に末後の水を注いでやった、嘉鶴子が最後の言葉は三浦補導の腕に抱かれながら『先生、どうぞ教えて頂戴!』とやはりその囁語(ささやか)も芝居の事に聞していた。

私は実家に引取られた翌朝、其の屍体を訪うたのであるが、生前に嘉鶴子を責監したあの刀は今も枕辺

の悪魔を除ける護り刀となっていた、生徒一同揃いで新調したお納戸色縮緬の晴れ衣裳、桐の葉くづしの裳模様はうす暗き屏風のかげに、ふうわりと彼女の後半身を覆うていた、白布をとると微笑んで今なお生けるが如き顔、マーブルの塑像のようだった、余りに白く血の気のない唇は固く閉じて……再び開かぬのである、櫛の一葉で掬んだ水を一滴二滴その口に流しこんでやった、そばに居た舞の師匠も生徒の芳子も顔を上げずに泣いていた、死んだ嘉鶴子に能く似た妹や弟を見るにつけ今更に思い出を深からしめる、お父さんは頗る諦めのついた風で物語っておった、私はあの白くこわばった唇に、お紅を差してやりたかった、せめてもの女優として此の世の名残に、しかしあの難しいお父さんの手前それもなし得なかった、彼女は処女として死んだ、それが美しい、あの唇は何人にも許さなかった、女は死んでから閻魔の前で自分の産んだ子の臍の緒を沢山持つて行かなければ罪は免されぬというけれど、それは嘘だ、天使の如き嘉鶴子は直ぐに天国に行つて了うに違いない、主なき晴れ衣裳は一枚残った、しかし嘉鶴子は雪のような白衣を着てこれから天上座の舞台に登るのだ、そう思えば可い。」

(高尾亮雄、一九一三、七四―七七)

佐藤愛子が毛嫌いするのもわからないわけではない文章だ。それにしても、高尾亮雄は明治十二(一八七九)年生まれだから、大正二(一九一三)年には三十四歳、『女優万里子』は「いけ好かない軟弱野郎」の横顔を「あま玉杯に花うけて」の佐藤紅緑と対比させ、鮮やかに描き切った小説ではある。実はこの二人、『大阪日報』に共に籍があったことがあり(田中英夫、二〇〇六)、川上音二郎と提携し演劇に力を注いだこと(佐藤、二〇〇八)などでは、共通点があった。年齢は佐藤紅緑が五歳年上ということで三十九歳。紅緑について詳しくはないが、

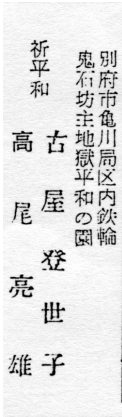
案外楓蔭と近い所があったのではないだろうか。

3. 古屋登世子

高尾亮雄の晩年の女性といえは古屋登世子である。昭和二十八（一九五三年）二月十日「無我愛」第一八五号に「祈平和」として古屋登世子、高尾亮雄の名前が並んでいる。住所は別府市亀川局区鉄輪鬼石坊主地獄平和の園。

「無我愛」は愛知県碧海郡明治村大字西端、無我苑、伊藤証信発行、世界連邦建設同盟無我苑支部もあつたようだから古屋の関係であつたか。別府に住んでいたのは梅田凡平、油屋熊八が既に鬼籍の人とはいえ、高尾のお伽船以来の関係だろう。この別府生活、昭和三十（一九五五年）十二月一日「月刊・朝日児童文化」第三卷十二号の《誌友来信》欄で、高尾亮雄氏とあり「三年間の別府生活から関西へ復帰、左記におちつかれました（神戸灘区薬師通一ノ八河野方）」とあるから、戦争疎開ではなく、昭和二十八年前後三年間を別府で過ごしたとこのことのようにだ。

ところで古屋と高尾は別府で会つたのではない。ここに高橋良和の証言がある。



「無昭八十一掲
愛」十月第二号告
版二和二五
図我和年日八載

「わたしは若いころ久留島武彦から、よくこの高尾楓蔭のことを聞いていたが、大阪であ

ったので訪ねる機会がなかった。

ところが、終戦後、はからずも高尾は、わたしと同じ町内に一人の女性と共同の生活をしてきた。その女性というのは古屋登代子である。古屋は世間に名高い人で、古屋英語塾を開いて、以前から英語の指導をはじめていたが、どうしたとかこの塾をやめてしまつて高尾と同居したのである。その理由はしらない。二人は大阪から京都にきて同居していたときにわたしはじめて訪ねたのである。おそらく二人とも孤独であつたから、意見が合つたのであろう。

そして二人とも全く奇人の風格があつておもしろいかつこうをしていたことを思い出す。生活はどうしてやっているのか、二十代のわたしにはわからなかつたけれど、どうやら古屋のあとに高尾がついていたようである。

京都ではいつも会っていたが、知らぬ間にどこかに行つてしまつた。そして二人の晩年のことは、わたしは全然知らない。しかし昭和三十年九月(一九五五)に高尾は逝つた。九十一歳であつた。」

(高橋良和、一九八七、二〇七～二〇八)

つまり、別府へ行く前は、高尾と古屋は京都で共同生活をしていたようである。古屋が「世間に名高い」とあるのは、今ではまったく理解されないだろうから、少しいねいに書き残しておこう。まず、人名辞典の記述である。

「古屋登世子 ふるやとよこ 明治二〇年（一八八七）ごろ～昭和三〇年（一九五五）」

大正・昭和期の英語教育者。山梨県に生まれる。父結城無二三はもと新撰組参謀。兄は結城礼一郎（号桂陵）。大正六年（一九一七）秋、大阪の一隅に英語の寺子屋を開く。その後三〇年で生徒数三〇〇名を超え、古屋英語塾となり、関西でも著名な英語専門学校に育った。登世子は武士道的キリスト教の教養を身につけた進歩的女性で、『凡人の哲学』の英訳はとくに有名。昭和一〇年（一九三五）四月七日縁者や知人らが、登世子を狂人として隔離し、塾を乗っ取った「古屋事件」が起きる。登世子はその事実を『狂乱から復活へ』（昭和三〇年）の題名で自伝として出版、大きな反響を呼んだ。晩年は世界連邦主義を奉じ七十一歳で死没。著書に前掲のほか『女の肖像』がある。（『狂乱から復活へ』）（『日本女性人名辞典』、一九九三）

高橋良和とともに高尾が昭和三十年九月逝去したというのも、古屋が昭和三十年死没したというのも正確ではない。高尾については先の朝日児童文化の記事があるし、古屋の『女の肖像』は昭和三十七（一九六二）年九月十日発行である。別府で二人の生活が解消になったわけではない証拠に、『狂乱から復活へ』の編集所は神戸市灘区葉師通一ノ八河野邸内世界連邦の家となっており、古屋登世子、高翁の連名になっていた。高翁が高尾楓蔭であるのはまちがいがなからう。二人はまだまだ生き続けるのである。

それはさておき、「父結城無二三は新撰組参謀」というのは何を根拠にしているか。実は、兄結城礼一郎が書いた『旧幕新撰組の結城無二三』（玄文社、一九二四）という本が存在している。この本には『お前達のおぢい様』という別名があり、父が子どもたちにおじい様のことを語るといふスタイルをとっている。そのおじい様、

結城無二三は見廻組として上京、新撰組に加わり戊辰戦争までを戦う。維新後はキリスト教伝道に心血を注いで、貧乏に耐えて五人の子を成した。その生涯を息子礼一郎が結城無二三から聞き取った伝記であった。もちろん娘の登世子の名前も出てくる。

「(明治二十五年)イビイさんがお父さん(礼一郎のこと)を呼んでいろいろ質問なさった末、よろしいこの見は私が引き受けた。加奈陀ではいけない倫敦へやって勉強させようと言って下さったら、ウイントミュートさんはそれなら私は妹さんの方を引き受けましょうと言って、おトヨ叔母ちゃんを引き取ってすぐ学校の寄宿舎へ入れて下さった。おトヨ叔母ちゃん今でこそ眼鏡をかけて洋服を着て古屋女子英学塾の校長でございなぞと言って威張っているが、この時にはどうしても異人さんの児になるのはいやだと言って泣いたものだ。おトヨ叔母ちゃんはその時十三だった。」(結城礼一郎、一九二四、一三五)カッコ内は引用者注

「御臨終の時には子供ら一同枕許に揃っていた。おトヨ叔母ちゃんもおマサ叔母ちゃんも大阪・京都から駆けつけて来た。」(結城礼一郎、一九二四、一六二)

古屋の『女の肖像』で対応している部分を引用してみると、

「ところが兄が十四、私が十二になった時、一旦帰国したイービーさんが再び来朝、私ども兄妹三人の教育に絶好の機会をもたらしてくれた。兄は東洋英和学校(麻布高校の前身)私ども姉妹は東洋英和女学校に、

いずれも貸費生として入学を許されたのであった。まことに天の救い、神様は決して私たちを見捨てなざらなかつた。」

(古屋登世子、一九六二、三〇)

また『狂乱から復活へ』でもほとんど同じだが、戦後京都に居た事情は次のようであつた。

「昨日まではスパイあつかいされた身が、今は手のひらをかえすように重要視され、世の中のいいかげんさが、つくづくいやになつたが、国家の要求とあつてはそんなこともいっていられないので私は大急ぎで上洛し、京都東山知恩院山内に模範通訳者養成学会として名乗りをあげた。」

(古屋登世子、一九六二、二二四～二二五)

さらに別府へ行つたことは以下のように書かれている。

「その間、霊能治療のほうはすっかりお留守になつていたところ、青森県八戸市の前市長神田氏(七年間新造弁膜症で悩んでおられた)が、私の遠隔治療で非常に経過がよいので、出来たら出張してその地方の病人救済のため尽くしてもらいたいとの懇請があつた。」

住むべき一定の家を持たない私は、治療巡礼の旅にのぼることになり、東は青森、仙台から、南は山陰の鳥取県三朝温泉をへて、京都府下の亀岡、綾部に滞在中、はからずも招かれて九州別府の泉都にたどり

つき、石の上にもはや三年が夢の間に過ぎてしまった。」

(古屋登世子、一九六二、二一五)

人名辞典では書かれていなかったが、古屋は手かざしの霊能力者としても晩年有名だった。ところで、高尾と古屋はいったいどこで会ってどんな関係だったのだろう。実は二人が会ったのはかなり以前だったのだ。古屋英語塾を主宰していた古屋登世子は、大正末にはじまったラジオ放送にも関わっていた。大正十四(一九二五年)二月十三日から約三週間大阪朝日新聞社によるラジオ実験放送にも出演し(宇佐美昇三、一九八一、三二)、そのことを『女の肖像』に書いている。

「現在の放送局の出来る以前、私は大阪朝日新聞社の、応接室に、防音装置を施した臨時の放送室と、高嶋屋百貨店の臨時の受信聴取室で、私は自分の経営する女子英学塾の生徒五十余名をつれ、三十余を高嶋屋において、二十人余を伴って放送室に入り、はじめは大きな声をはり上げた。どなるようにせねば聞えないだろうと想像したからである。

すると、『普通の声でお願いします』と注意されてしまった。ではと、ふだんの声で挨拶するととてもよく聞えると高嶋屋から連絡があった。

ひきつづきエスペラント語で……当時、大阪はエスペラント語ブームだったので、生徒たちと私はエスペラントの歌エスペローを歌ったが、これもよく入ったと高嶋屋から快報があり、テストは大成功裡に終わった。」

(古屋登世子、一九六二、一〇〇～一〇二)

ここには二つ高尾と接触する要素がある。大阪朝日新聞社とエスペラントである。『大阪エスペラント運動史』第三部という小冊子に古屋の名が出てくるプログラムがある。

「資料番号24―4 プログラム 一九二四―十一―十三

拝啓

今月廿二日及廿三日両日午前十時開場 午後一時開演当塾内に於て本塾創立七周年記念及今回増築の新校舎落成を祝ふため塾生の英語及エスペラント語文芸会を開催可致に付き何卒御來臨の榮を賜り度、右御案内申上候。

敬具

大正十三年十一月十三日

古屋女子英学塾長

古屋登代子

第一部

- | | | |
|----------------|--------------|-------|
| 1. 開会之辞(エス) | 塾長 | 古屋登代子 |
| 2. 祝辞(エス) | 専門部三年 | 保永静恵 |
| 3. ハムレット独語(エス) | 同上 | 朴木静子 |
| 4. 模範演説(エス) | 万国エスペラント協会代表 | 相坂 侑 |

第二部

1. 合唱 … タギーヂヨ(エス) 専門部三年

8. 対話 … 再開迄(英・エス) 同上

(松本茂雄、一九七九、五一〜五二)

『日本エスペラント運動人名小事典』によると、高尾は大正十一(一九二二)年に朝日新聞社へ入り、大阪のエスペラント運動の先駆者だったという。高尾が一八七九年生まれ、古屋が『女の肖像』によると一八八〇年生まれでほとんどこの二人は同年代であり、ともに四十歳を越えたころであった。エスペラント側の資料で高尾と古屋が並んでいるもので、今わかる限り古い資料は、『大阪エスペラント運動史』(I. 一九一六―一九四三)にある、J E I(日本エスペラント学会)大阪支部創立の際の創立委員と発会式での弁士の名簿である。

「1924 10―10

J E I 大阪支部創立発会式 南区安堂寺町渥美小学校にて

J E I 大阪支部創立委員及び弁士

大阪外国語学校教授 浅井井恵倫

国際通信社 相坂 侑

大阪三鱗化学所長 米田徳次郎

古屋女子英学塾長 古屋登代子

住友電線社員 佐々木祐正

関西学院 高瀬嘉男

大阪朝日社員 高尾亮雄

大阪市役所 荒井安衛

図案家 辻 利助

大阪外語仏語科 磯崎 嶺

著述家 高田集蔵

三鱗化学社員 平出種作

早稲田大学 川崎直一

(松本茂雄、一九七六、五〇六)

ラジオ放送、エスペラントで大正一三(一九二四)年ごろには高尾と古屋は知り合っていたのである。ただこれよりさらに古く関係がうかがわれるのは、兄結城礼一郎とのことにからなのである。彼の出版社、玄文社が大正八(一九一九)年に出した「新聞研究」という雑誌の第一巻四号「子供新聞は日本にもある」という記事では、高尾がまだ朝日新聞に入る前、子ども向けの新聞を発行していて、さらに古屋がそれに深く関わっていたことを伝えている。

「『少国民新聞』は成程高尾君御自慢だけのものがある、紙と印刷とは英国のに及びもないが扱つて居る事は英国のよりもずっと振つて居る、時事問題の説明なぞ吾輩が多年理想として居た点まで進んで居る。誠に以て面目ない。穴があつたら入りたいと思つた。

すると間もなく矢張り大阪に居る愚妹から手紙が来た愚妹は畢竟愚妹で、永久兄を困らせる事にのみ生きて居るものと思つて居た、英語は少しは出来るが現在天王寺で古屋女子英学塾と云うのを独力経営して居る以外には何一つ取り柄はないと思つて居た。其の愚妹から来た手紙は斯様である。

『今度英語で創刊されたと云う子供新聞は、それが日刊でもあれば兎に角、週刊と云うのでは別段世界に類の無い珍しいものではないと思ひます。現に大阪には「少国民新聞」と云う、Weeklyがあつて創刊後一年余りを経過し相当の成績を挙げて居ります。其前身たる「幼年新聞」こそ英米にも類を見なかつたDailyで、非常に高尚な理想の下に幼年子女の好伴侶たり良師友たらんとしたものでした。其新聞の發行には、私は当初から深い関係を持ち御伽噺やら冒險談やら理科の御話やら主として私が受持つて居ました其節兄さんにも確に御話しました。兄さん其れを御忘れになつて「新聞研究」に「日本にも是非此種の新聞が欲しい」なぞと御書きになるのは、近頃何様かなさつて居るのでは有りませんか。』

(結城礼一郎、一九一九、十四)

この引用の前に、高尾君は古くからの友人であるとも書かれていた。そうなると大正のかなり早くから、高尾と古屋は共同していろいろな仕事をしていたことがわかる。

このように晩年を寄り添って過ごした二人だが、高橋良和が推察したように古屋の後を高尾がついて行く関係であり、古屋の方がそれを拒めば、それで終わりになるような関係だった。なんの記述も残っていないが、古屋の二つの著作、『狂乱から復活へ』と『女の肖像』は一九五五年から一九六二年と、発刊の間が七年空いており、書かれている事実はほとんど同じことが扱われていた。『狂乱から復活へ』ではそのあとがきに

「追て私どもは十月八日別府を引揚げ左記に移転いたします。

神戸市灘区葉師通一丁目八 河野邸内

市バス五毛停留所下車山手一丁東入

—世界連邦の家—

古屋登世子

高 翁

(古屋登世子、一九五五、一九六〇)

と、あり、古屋と高尾が別府からちょうど引き揚げる時だったのだ。

古屋登世子が靈感を得た一九四八年頃の山中湖での断食体験は、どちらの本にも書かれている。その記述を比べてみよう。

「時々、人事不省におちいった私の両手を握ったままデット私の顔を覗き込んでいる高翁の顔がウスボンヤリと映って来たのはシンシンと更けゆく夜中頃であった。身体は氷の如く冷たく頭はボツと湯気が昇るほど熱い、薄い煎餅蒲団にくるまって、凍えそうにガクガク震えている私の身体を自分の肌の温度で暖めようとあせる高翁の様子を見ると、急に悲しくなつて涙の堰が一時に切つておとされた。」

(古屋登世子、一九五五、一三三～一三四)

「ときどき、人事不省におちいる。

身体は氷のごとく冷たく、頭はボーツと湯気が昇るほど熱い。

薄い煎餅蒲団にくるまって、凍えそうにガクガクふるえている私は急に悲しくなつて、涙の堰は一時に切つて落とされた。」

(古屋登世子、一九六二、二二六～二二七)

見事に高尾だけが消されている。一九六四年には高尾亮雄は死ぬはずで、まだこの時は生きていただろうが、古屋はもう過去のことを顧みていない。

おわりに

高尾亮雄の号、楓蔭はおそらく高尾が明治から大正にかけて住んでいた大阪府箕面市に由来する。箕面は紅

葉の名所であり、その楓を取り入れたものだろう。その箕面で独自の楓蔭研究が進んでおり、仄聞するに楓蔭の妻が養老院に居り、聞き取りをしたものがあるようだ。もしそれが事実なら、高尾の家庭生活はもつと明らかになるであろうと期待される。手持ちの資料だけで、この稿を書いたが、新しい事実が明らかになれば、特に三笠万里子の第二章と、古屋登世子の第三章は書きかえなければならなくなるかも知れない。永く世の関心から打ち捨てられていた感のある高尾であり、筆者本人もそのあまりの反応のなさに、居眠りをはじめかけていたのだ。ところがこの所、阪神別府航路開設百年でもあり、それがらみで「お伽船」への思いもかけぬオプアアがあつたり、宇崎スミカズがお伽船に乗ったことでスミカズについての原稿依頼があつたりと、地域おこしへの関心とともに高尾亮雄の名が思い起こされてきたように感じられる。また、少しそれよりは前になるが、志賀志那人研究の進展もからんでいる。これはなかなか頼もしい。別府や大阪や箕面で地域の記憶への研究がさらに進んで欲しいものだ。その流れに少しでも役に立てばと、敢えて足りない資料で拙文を記した言い訳としておく。

参考・引用文献

- 井上治郎「臨海学校・林間学校」『日本大百科全書』電子版、二〇〇一、小学館
- 宇佐美昇三「ラジオ英語教育ははじめ―初期BK・CKでの試み―」『NHK文研月報』一九八一年二月、NHK総合放送文化研究所編、日本放送出版協会
- 大阪社会労働運動史編集委員会『大阪社会労働運動史』第一卷(戦前編・上)、一九八六、大阪社会運動協会
- 大谷渡『菅野スガと石上露子』一九八九、東方出版
- 『月刊・朝日児童文化』第三卷十二号、一九五五年十二月一日、朝日児童文化の会

- 神戸新聞大正二年二月十日記事「聚楽館女優の応募者」一九一三年二月十日
神戸新聞大正二年二月十九日記事「女優志願七十名」一九一三年二月十九日
神戸新聞大正二年三月十日記事「聚楽館女優試験」一九一三年三月十日
神戸新聞大正二年四月九日記事「新女優の始業式」一九一三年四月九日
神戸新聞大正二年六月二十九日記事「女優の余裕芸」一九一三年六月二十九日
神戸新聞大正二年八月十九日記事「竣工せる聚楽館」一九一三年八月十九日
以上は神戸市立中央図書館蔵マイクロフィルムからのコピー
- 佐藤愛子『女優万里子』一九七四、文藝春秋
佐藤愛子『佐藤家の人びと―血脈と私』二〇〇八、文藝春秋（文春文庫）単行本は二〇〇五
高尾亮雄著、堀田穰編『大阪お伽芝居事始め―「うかれ胡弓」回想と台本』一九九一、関西児童文化史研究会
高尾亮雄「呼、嘉鶴子は死んだ」、『文藝画報』第二年十一月号（第二十二号）一九一三年十月二十五日
高橋良和『自叙伝的児童文化史』、一九八七、探究社
宝塚少女歌劇団『宝塚少女歌劇団二十年史』一九三三、宝塚少女歌劇団
武内善信「ユニテリアン社会主義者小笠原菅至夫と南方熊楠」一九八九年三月、『キリスト教社会問題研究』第三七号、
同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会
武内善信「高尾楓蔭小論―初期社会主義とお伽芝居―」一九九六年三月、『ヒストリア』第一五〇号、大阪歴史学会
田中英夫『山口孤剣小伝』二〇〇六、花林書房
富田博之『日本児童演劇史』一九七六、東京書籍
『日本女性人名辞典』、一九九三、日本図書センター
古屋登世子『狂乱から復活へ』一九五五、世界連邦の家編、人間医学社
古屋登世子『女の肖像』一九六二、アサヒ芸能出版出版事業部
古屋登世子名で一九四〇年、三友社刊同名の本があるが未見

堀田穰 「高尾亮雄とその仕事」 高尾亮雄著、堀田穰編 『大阪お伽芝居事始め―「うかれ胡弓」 回想と台本―』 一九九一、関西児童文化史研究会

堀田穰 「楓蔭高尾亮雄の明治四十年代」 二〇〇〇年三月、『京都文化短期大学紀要』 第三一・三二合併号、京都文化短期大学学会

堀田穰 「雷淵大道和一、お伽運動への関わりと、その死」 二〇〇三年七月、『人間文化研究』 第十一号、京都学園大学人間文化学会

松本皎 「左千夫・静処・雷淵」 二〇〇九年一月、『養笠亭・愚庵・古道人研究』 第三号、松本皎

松本克平 『日本社会主義演劇史―明治大正篇―』 一九七五、筑摩書房

松本茂雄編 『大阪エスペラント運動史』 第三部 1916―1979 回想編、一九七九、柏原エスペラント資料センター・

長谷川テル記念協会

松本茂雄編 『大阪エスペラント運動史』 1. 1916―1942、一九七六、柏原エスペラント資料センター

「無我愛」 第一八五号、一九五三年二月、無我苑、伊藤証信発行

結城礼一郎 『旧幕新撰組の結城無二三』、一九二四、玄文社、テキスト、引用ページ数は中公文庫版、一九七六

結城礼一郎 「子供新聞は日本にもある」 一九一九年十一月、『新聞研究』 第一卷四号、玄文社